

庄野潤三「静物」

——「今」という閉じられた世界——

大 迫 敬 典

はじめに

「静物」は庄野潤三が一九六〇年に「群像」(六月号 第一五巻 六号)に発表した作品である。作品が執筆された当初、「いかようにも読める」という意見が出たように、この作品は発表当初から様々な解釈がなされてきた。その中でも、作品の特徴ともいえる、断片的なエピソードをつなぎ合せて出来た構成は、多様な解釈を生み出す一要素として注目される。例えば平野謙は構成について「作者は一見無造作にスケッチをつみかさねているようで、実は細心な手つきでこの幸福げな家庭を扱っている。」とし、「家庭の再建」という結論を導いている。また、山崎一類はそれらを反対の要素として取り扱っており、「これまでの小話はすべて、不安や恐怖を喚起する材料であり、これらのイメージが重層的に強固なものとなり、あの『家庭の出来ごと』を暗示していく。」と述べ、断片的なエピソードは、過去の自殺未遂を喚起させる材

料であると考察している。以上のように作品の構成については、異なる結論への一要素として扱われることが多いことが考えられる。

しかしこの構成については、「『静物』なんかの場合ですと、あの小説が成り立つかどうかは、その順序に言っているといいぐらい自分では苦しんだわけです。極端に言えば、三番目と四番目を逆にしたら作品は成り立たない。」と、庄野自身がインタビュで述べている。このことから考えると、庄野はこの作品の構成により意識的に取り組んでいたと言え、だからこそ構成という点を中心としてこの作品にアプローチするということは、重要な意味があるのではないだろうか。

そもそも「静物」は、十八の断片的なエピソードから構成されている。一つ一つのエピソードは、一女二男を持つ父親を通して、その家庭の日常生活を描いたものである。一見するとたわいのない出来事がこの作品の多くを占めているが、この家庭の過去には細君が自殺未遂(のようなもの)を行ったことがあり、これ

が作品全体に大きな影響を与えている。そして、基本的にはこの出来事を起点としてこの家庭には「不安や危機」があるといったり、そこから「再建した」という読みが出て来ているのである。

ではこの作品の構成そのものに焦点を当ててみるとうどうであろうか。ここで注目したいのは、エピソード自体が断片的であるから、一つ一つのエピソードに基本的に繋がりは無いということ、そして、作品の具体的な日時を示すようなものがほとんど無いということである。これらの事から言えるのは、作品の出来事のこととは「その時」という時間で構成されているということである。言い換えるならば「時間経過」というものが抜け落ちてしまっているのである。

この構成には一体どんな意味があるのか。私は作品中の出来事に流れる「その時」という時間、つまり「今」という時間に何か意味があるのではないかと考える。ここで私は、時間経過のない「今」で構成されたエピソード群を、「『今』という閉じられた世界」と定義する。そしてこの作品構成と、それらの中にある例外的存在、「時間経過のあるもの」との関係性に焦点を当てることで、この世界にはいったいどんな意味が込められているかを考察し、最終的には「静物」という題名にはどんな意味があるのかを考えていきたい。

第一章 作品構成の分類と検証

第一節 「時間経過」を基準として「過去」、「今」、「未来」への分類

それではまずこの作品の構成に注目して「時間経過」という点から作品の要素を分類していきたい。

まず「時間経過のあるもの」として挙げられるのは、「細君の自殺未遂」である。これは第十四章で細君が自殺未遂を図ってから、第二章で細君が回復している描写があり、細君の「自殺未遂からの回復」という点を通して時間の経過が読み取れるからである。

次に挙げられるのが「金魚」である。第一章では、「実に小さな金魚であった。それは目高のようなど云ってもいいくらい、小さかった」⁵⁾とあったがそれが第十章では「金魚は最初にこの家へ来た時からくらべると、いくらが大きく変わったように見えた。」とあることから、金魚が成長していることを窺うことが出来る。ここで金魚は「成長」という点を通して「時間経過」のあるものと判断することが出来るのである。

また「子供たち」についても挙げる事ができる。第一章では小学一年生だった男の子が、第六章では小学二年生へと変わったとあり、「金魚」と同様やはり「成長」していることが分かる。このことから「時間経過」のあるものと判断することが出来る。

最後は「糞虫」である。糞虫は「最初、近所の家の庭の木にいた」ところから男の子が捕まえて「三日ほど経って」箱の中に巣を作ろうとし、その後「二週間ほど経ったある晩」、箱から逃げ出した糞虫は子供たちの勉強部屋に巣を作っている。このように、糞虫は具体的な日数を伴って「巢の作成」に関する経緯が描かれており、やはり「時間経過」があるものと判断することが出来る。以上が「時間経過のあるもの」として挙げられるものである。

そしてこの「時間経過のあるもの」を詳しく見ていくとそこからまた二つに分けることが出来る。それは「細君の自殺未遂」と、「金魚」、「子供たち」、「糞虫」である。これは、前者が「過去」のことを表し、そして後者三つが「未来」のことを表していると考えられるからである。「細君の自殺未遂」については出来事そのものが作品の現在時間よりも前のことであり、「金魚」と「子供たち」はその現在時間から「成長」という点を通して、「糞虫」は「巢の作成」という点を通して「今」よりも前に進んでいるためである。

以上から「細君の自殺未遂」を「過去」、「金魚」と「子供たち」と「糞虫」を「未来」と分類することが出来た。それでは次に「今」を基準として考えたとき「過去」や「未来」はどういった存在となるのかということについて考察していきたい。

第二節 「過去」の検証

まずは「過去」についてである。「過去」のカテゴリーとして挙げられるのは「細君の自殺未遂」である。これは「今」を基準として考えたとき、細君の自殺未遂からの回復という点を通して「時間経過があるもの」であるから、「今」という閉じられた世界」とは「線を描する存在である。このことは出来事そのものからも考えることが出来る。「過去」では、「今」という時間で構成された、ほとんど変化のないエピソードとは違い、自殺未遂という大きな変化が起こっている。そしてそれによってたわいのない日常が続く幸福な「今」と、悲惨な出来事があった「過去」という状況の対比が浮かび上がるのである。そしてこのことは「今」と「過去」の表現の違いからも窺うことが出来る。

細君の自殺未遂に関する回想場面において注目したいのは、父親と細君がそれぞれ男（もしくは彼）と妻と表現されており、「今」とは違う表現がされていることである。このことから「今」とは違う存在であるということを示していると考えることが出来るのである。

以上から「今」を基準として「過去」を見てみると、「時間経過」があり、「今」と「過去」の状況の対比、父親と細君の表現の違いから、「今」という閉じられた世界」とは異なる存在であると言えるのである。

第三節 「未来」の検証

次に「未来」に分類されるものについてである。「未来」に分類されるものは「金魚」と「子供たち」と「糞虫」である。これらの存在も「過去」と同様、「今」という閉じられた世界」とは異なった存在である。

ではこれらの存在は「今」ととってどのような存在であるのだろうか。それは「今」ととって必要不可欠な存在であると考えられる。なぜなら「子供たち」が「今」を構成する要素になっているためである。「今」という閉じられた世界」を見てみると、子供たちが登場しない時は無く、「細君の自殺未遂」に関わるもの、「金魚」と「糞虫」に関わるものを除けば、ほぼなんらかの形で子供たちは直接登場しているのである。このことから、この「世界」には、子供たちの存在が必要ということが考えられるのである。

以上から、「今」という閉じられた世界」のためには、「今」から「未来」へと向かって進んでいる「子供たち」の存在は必要不可欠であるが、彼らの存在そのものが「時間経過のない」その「世界」の成立を不可能にしており、ここに「世界」の成立に対するジレンマが発生すると考えることが出来るのである。このように「未来」というものについては、「今」という閉じられた世界」とは違う存在ではあるものの、それらの存在が「世界」ととって必要不可欠なことから、その「世界」の成立に対するジレンマを発生させる原因ともなるということが言えるのである。

第二章 構成の検証結果からの考察と「静物」の意味

第一節「過去」と「未来」の共通点と「未来」に対する「不安」

ここまで「過去」と「未来」を検証してきたが、その中で言えることは時間経過の無い「今」という閉じられた世界」という空間にととって、どちらも一線を画した存在であるということである。そうするとここで更に考察しなければならぬことが浮び上がる。それは「今」が何故悲惨な「過去」だけでなく、「未来」までも不要とするのかということである。「未来」は時間経過のあるものであるから、その点から考えれば、時間経過の無い「今」という閉じられた世界」には不要な存在である。しかし「未来」は「過去」と違い、確定した事柄ではないのである。つまり「今」のままの日常が続く可能性のある「未来」については、その存在が許容されてもおかしくないと考えることが出来るのである。

このことを考える際に重要になるのは、父親の考えである。彼は子供部屋にある、金魚を見て次のようにも考えている。

いきなりボールが何かが飛んで来て、まともに命中するかも知れないし、誰かが押された拍子に当たって倒すかも知れない。(中略) 何時か誰かがやるかも知れないという不安は、決して父親の頭から無くなってしまいはしなかったが。

このように父親は、「未来」の要素が集まる子供部屋にある金魚に対して何か起こるかもしれないと不安を感じているのである。以上の事から、「今」という閉じられた世界」が不確定であるはずの「未来」をも不要とするのは、父親が「未来」に対して不安を覚えているからであるということが言えるのである。

第二節 「今」II「閉じられた世界」について、作品構成のまとめ

それでは今述べてきた「過去」と「未来」を基にして今度は「今」という閉じられた世界」についてまとめていきたい。「今」という閉じられた世界」においては、基本的に時間経過というものは無い。これは言い方を換えれば時間経過という点において、細君の自殺未遂という「過去」からも切り離され、また「未来」という時間からも切り離されたものということになる。しかし先述したように、この世界には子供たちや金魚などといった「時間経過のあるもの」の存在が必要不可欠である。つまり子供や金魚は、「今」という完結した世界」を構成すると共に、「未来」に向かって破壊しようとする存在とも言えるのである。ここに世界の構築が不可能なことが分かるのである。ではこのジレンマにはどんな意味があるのか。最後に「静物」という題名と関連付けて考察していきたい。

第三節 「今」という閉じられた世界」と作者の小説に対する姿勢

庄野は自身の小説について、「断片でとらえた静止した形、静止した形での人間の姿のおかしみとか悲しさとか不思議さとかに惹かれて、それを小説にしようとするわけだ。」と述べている。つまり、「静物」という題名と庄野の小説を書く姿勢、延いては小説の表現というものには密接な関わり合いがあると言える。それでは「静物」における「静止した形」とは何なのであるか。それは構成という点から見れば、半沢幹一が「静物」という題名は、作品全体としてもより個々の章にこそふさわしいと言えよう。」と述べているように「静止した形」とは個々のエピソードのことであり、更に言うならばそれらの中に「時間経過」が無いということであろう。エピソードが個々に独立しているからこそ、「静止した形」を表現できるのであり、そうすることで「時間経過」を無くし、「静物」の中における「静物」が完成するためである。

しかしながら今まで考察してきた「今」という閉じられた世界」にこのことが全てあてはまるかというと、そうではない。何故ならこの「世界」は「未来」という要素における「時間経過」を許容しているからである。つまり、厳密に言えば「静止した形」とは言えないのである。「今」という閉じられた世界」は、その世界には時間経過の無いことが絶対条件である。この条件を満たせば、庄野の言う「静止した形」での小説が成立していると

言える。しかしその一方でこの「世界」というのは、時間経過のある存在があつて初めて成立するものでもある。つまり、ある種の矛盾を内包してこの世界は存在しているわけである。「静止した形」を小説にしようとする庄野が、構成において「時間経過」の存在を許し、何故そこに矛盾を発生させたのだろうか。このことを考える際に、庄野が小島信夫と対談を行った際に述べた、次のことを参考にしたい。

人間が生きていることはそれ直ちに不安定ということなんだ。(中略) いくつかなるかわからなくても、不幸な状態をたやすく招いちゃいかんぞという気持ちで生きている。これは危機感なんて口で言うより何層倍の努力と緊張を要するものですよ。⁸⁾

ここで庄野自身は、人間が生きていくということはそれ自体が「不安定」なものであるとしながらも、努力して不幸な状態をたやすく招かないような「安定」を保つことだと考えている。言い換えるならば、「不安定」と「安定」という二つの相反するものの同居こそが生きていることであると考えているわけである。

そしてこのことは「『今』という閉じられた世界」にも当てはまるのではないだろうか。それはこの世界においても「時間経過が無い」という前提と、その世界の成立に不可欠な「時間経過のある」、「未来」の要素が同居しているからである。つまり「相反

するものの同居」をこの構成を以つて表現しているわけである。以上の事から、「静物」という題名には庄野の考える人間が生きていくということへの考えが込められていると言えるのである。

おわりに

この論文では「静物」の構成に注目して考察を行ってきた。そこには前提として「時間経過」というものが存在せず、例外的に「過去」や「未来」といった存在が「時間経過」があるものとして登場している。そしてそのことが「『今』という閉じられた世界」の成立を不可能にしているのである。

「静物」という題名には「時間経過」のある「不安定」の中でも「今」という「幸福」な「安定」のままの「静止した形」、即ち「静物」であつて欲しいという、庄野の人が生きていくということへの考えが表現されていると考えられるのである。

注

- (1) 阪田寛夫「庄野潤三ノート」(庄野潤三『庄野潤三全集 第三巻』講談社 一九七三年九月)
- (2) 平野謙「文藝時評」(毎日新聞 一九六〇年五月二七日)
- (3) 山崎一穎「『第三の新人』の文学 庄野潤三『静物』」(『国文学解釈と鑑賞』第四二巻第一一号 一九七七年九

月)

(4) 中村明「現代文学とことは・8 庄野潤三」(『言語生活』第三〇〇号 一九七六年九月)

(5) 庄野潤三「静物」(『群像』一九六〇年六月号 第一五卷六号)。尚、作品本文の引用については特記しない限り『静物』(講談社 一九六〇年一〇月)に拠った。また、旧字体、歴史的仮名遣いはそれぞれ新字体、現代仮名遣いへと変更し表記している。

(6) 小島信夫、庄野潤三対談「文學を求めて」(『新潮』第六二巻第一二号 一九六五年一二月)

(7) 半沢幹一「庄野潤三―「静物」の光と影―」(『表現学大系 各論編 第一五巻 小説の表現 二』教育出版センター 一九九九年三月)

(8) (6)に同じ

(おおさ・たかふみ 二〇二二年度本学卒業生)